

# 第1回 新交通システム導入方策調査検討委員会 議事要旨

日 時：平成 16 年 8 月 26 日（木） 13：00～15：00

場 所：ホテルサンシャイン 2階エメラルドホール

出席者：古池、石井、臼井、小花、麦倉、小林、和田、寺内、根岸、向後、塩崎、平田、馬場、栗田、手塚、森

## [ 次第 ]

開会の挨拶

委員紹介

委員長挨拶

委員会の公開・非公開について

資料説明

議事 < 今年度の検討スキーム、委員会での検討の進め方について >



委員会の様子

## < 委員会の公開・非公開について >

委員長： 新交通システムに関して、市民に対して十分な情報公開ができていなかった。できるだけオープンにして、市民自身に自分たちの問題として考えてもらうべきと思う。

事務局：事務局としても原則的に公開で実施してはどうかと考えている。

委員長： では、公開の方向で進めていきたい。公開方法はどのように考えているか。

事務局：記者の受け入れ、市のホームページでの議事の公開等による公開を考えている。

委員長： 将来的に必要なになれば、傍聴人を含めることも考えられるが、別途開催の交通まちづくり懇談会に公募の委員も入っているので、こちらの委員会は専門的な議論の場としたい。

<今年度の検討スキーム、委員会での検討の進め方について>

委員：先日、金沢市内のP & B R、富山市の路面電車を視察してきた。富山は新市長が事業推進派であり、県と市町村との連携が非常にうまくいっている事例である。県はできることを積極的にやっていき、市は細かい要望を出していくということであった。ここでは、「弱い南北の交通軸としての路面電車整備を進める」というように、戦略的に何をまちづくりとして掲げていくのかについて目標ができていく。宇都宮市の場合も、戦略的に拠点的なものをまちづくりとして掲げていくことが大事だと思う。東西軸が不備なのは周知のことであるので、その整備が宇都宮市として必要不可欠である。

検討課題を整理していただいております、これはこれでよいと思う。これからは、もう総論をする状況ではないので、具体的な細かい各論の検討をこの会で詰めて、市民に情報提供していくことが大事であると思う。

委員長：具体的な今年の委員会の取り組みとして3つ挙げていただいているわけであるが、ご意見をいただいたとおり、総論の時代は終わりであり、これからは各論が必要である。参加委員の方には問題点があればどんどん出していただき、その解決方法について知恵を絞っていただきたい。

委員：この検討会は専門的委員会ということで、専門的かつ具体的な検討課題について、一つ一つ意地悪な目でリスクの部分だけを挙げながら検討していく段階ではないかと思う。

委員長：当然反対の方もいらっしゃるわけで、そういった方の意見も貴重である。それらの意見についても十分に検討することが必要である。

委員：一般市民でも、L R Tに関心のある方は、いろいろ調べていて非常に詳しいが、そうではなくて新聞等でしか聞いていない方々はL R Tについて殆ど知らない状況である。関心を持っていない方々にどのようにして関心を持ってもらうのかということが重要と思う。

委員長：市民へどのようにPRしていくかについては大きな問題である。交通まちづくり懇談会や市民懇談会の開催や、市民が立ち上げた応援団体によるPRがある。少し紹介すると、「雷都レールとちぎ（仮称）」という応援団体がありPRをしている。

委員：交通弱者の問題として、「足がない」ということが挙げられる。最近ではミニバスの団地内でのサービスがあり、交通弱者に人気がある。外環の中くらいは自由にアクセスできれば、と思う。また、J Rによる駅東西の分断も交通弱者には大きな障害である。

また、採算性に関して、借入金を直接金融にするのか間接金融にするのかという問題もあるが、現在、運用先がないという問題が出てきている。交通債のようなもの発行する直接金融でやってみてはどうかと思う。国債でも変動金利の個人向け国債も発行するようになってきているので、そういう方向も検討してみてもどうかと思う。

委員長：郊外にいくほど高齢者は交通圏が制限され、家に籠りきりの傾向がある。対応方向について今後議論を進めていく必要がある。採算性の話で、交通債の導入は一つのアイデアとして議論していくべきである。

委員：中心部に住んでも車で郊外に買物に行けないと生活できないという状況であり、

大きな問題といえる。L R Tの整備についてはまちづくりとの連携が大きな課題であり、L R T整備後にどのような生活(実際の移動、購買行動等々)になるかについても平行的に考えていくことが必要である。

拠点開発については、開発地域と中心部との関連も新たに出てくる。例えば、シンガー跡地で考えると、駅西の中心地との連携を考えることも課題と思う。これは、事業の採算性の問題とも大きく係ってくる。

また、運営主体をどうするのかという問題がある。できれば民間委託が良いと考えている。収益団体として経営を考えていかなければ成り立たないと思う。

また、市民は自動車の利便性を享受しており、L R Tで自動車の利便性をどのように代替するのかについて検討が必要である。

委員長： ラパークができて、西武百貨店の頃よりも駐車場利用の自動車が減っており、自転車や徒歩での来店が増えている。一方、拠点開発としてシンガー跡地開発が進んでいるが、新たに発生する周辺地域の渋滞に加えて、将来的に駅東西が接続された場合のストロー効果による中心部の衰退の心配がある。そのあたりがまちづくりとどのようにうまく関連していくかが課題である。

運営主体についてはいろいろなアイデアがあり、この議論については、交通事業者の方々が参加されているので率直な意見をいただきたいと思う。

委員： 進め方については、今後バス事業者からいろいろと意見が出てくると思う。一点心配しているのは、L R T導入が、すぐに中心市街地活性化に繋がるというバラ色の考え方が当事者にあるのではないかという気がすることである。この部分については、腰を据えて検討する必要がある。

委員長： 関係者も市民もL R T導入イコール市街地の活性化という間違っただけの幻想を持っているかもしれない。この部分については十分に考えていく必要がある。

ただ、L R T計画に関して、私は長く検討に関わってきたが、明らかにこの1年で日本全体のL R Tの考え方が変わってきていると思う。

委員： 将来的には、バスとL R Tの共存をイメージしている。現在、大通りのバスが9割を占めているが、この区間がL R Tと競合することになってくるので、経営方針が大きく変わると考えている。

委員長： 確かに経営方針は大きく変わる可能性がある。これが悪い方向ではなく、良い方向に変わるように議論を進めるべきである。バス事業者にとってL R Tは敵ではなく良いパートナーになれると考えることもできる。

委員： 率直に言って、L R Tの事業運営は採算性があるのかどうか疑問である。当然共存・共栄していくことが理想であるが、そのために具体的にどのようにしていくのかについては、今後議論が必要なところである。整備路線的には東西軸のL R Tに既存路線をどのように持ってくるかということだと思うが、乗せ方にもいろいろあると思うし、利用する市民がどのような形を望むのかということもある。これはすぐに決めるのではなくて、模索していく必要があると思う。

委員長： 既往の公共交通とうまく連携できないと成功しない。

なお、採算性について、今お話いただいた内容は、これまでの考え方での「採算性」であり、最近では、公共交通の「公共性」が取り上げられるようになってきている。欧米では都心部では公共交通が無料で利用できる等、公共性の考え方が進んでいる。今後、日本も変わっていく可能性があり、もし変わるとすればこ

れまでと違った議論になる。今回どこまでできるか分からないが、今後具体的に検討していきたい。

委員： まちづくりとの関連性について、駅東の開発がすぐに立ち上がるまちづくり事業として控えている。また、バリアフリー対応や改札変更等の駅の改良工事もおこなっている。こういった現在進めている事業について、皆さんに知っていただけるようにこの場で紹介していきたい。

なお、委員会を進めていく中で、まちづくりの部分がどのように変わっていくのかについてもう少し具体的に提示していく方が良いのではないかと思う。また、事業採算性がないと事業について判断できないので、採算性については、いろんな方面で検討が必要である。最終的には赤字ではまずいので、その判断について十分に議論していただきたい。また、LRT導入がどのくらい環境にやさしいのかについての検討も必要と思う。

委員長： 駅東の開発については、この場で十分な情報を提供していただきたい。

委員： 東武では、宇都宮線、百貨店、ホテルが3つの大きな柱であり、すべて中心市街地に立地している。中心市街地の衰退により大きな影響を受けており、中心市街地活性化について、LRTに期待するところは大きい。将来的な姿として、駅東西を含めた広域的なランドデザインが必要と考えている。

個人的に欧米の公共交通を見に行っているが、いずれの都市も乗り継ぎ・乗り換え等、利便性が高い。宇都宮の場合では、バスとLRTとの乗り継ぎ利便性が重要と考えられ、快適性・所要時間短縮等で車よりも便利・安価であることがアピールできないとなかなか一般市民の理解は得られないと思う。

委員長： カールスルーエ方式の郊外鉄道、例えば東武鉄道のLRT乗り入れも夢ではないと思う。この方式はいずれ日本中で始まっていくのではないかと考えている。

現在、国交省で新しい補助制度の検討がいろいろ進められていると思うが、そろそろ発表できるのか。

委員： 現在国交省において、LRTを含む新交通システムの導入に対して積極的に支援させていただけるように、さまざまなメニューの検討をしているところである。様々な補助メニューや支援メニューがあるので、ぜひ活用していただきたい。

委員長： 本日、いろいろな意見をいただいたが、厳しい意見も含めて、今後どんどん議論を進めていきたいと思う。次回、事務局からもう少し具体的な検討課題を準備していただいて、引き続き議論していく形としたい。

事務局： 次回は10月頃の開催を予定している。近づいたら改めて詳細連絡を行う。本日の議論は議事録で整理し、内容の公開にあっては事前に委員の方に確認を行う。基本的には無記名での公開を考えている。

以上